

アメリカの難民支援の現場から

清水 潤子

(Asian Services In Action, Inc Program Assistant / コミュニティ福祉学科 2008年卒業)

2014年にソーシャルワークと非営利組織マネジメントを学ぶためにアメリカのオハイオ州、クリーブランドの大学院にきた私は、コミュニティアセスメントの課題を通して、その地域にひっそりと生活する難民の存在を知りました。彼らは人種、宗教、国籍、政治的意見、または特定の社会集団に属することによって起こる迫害や人権侵害、武力紛争から逃れ、安全な生活や自由を求めて第三国定住を果たしてもなお、新しい環境で生きにくさと葛藤しています。ことばや文化の違いから、アメリカではマイノリティグループと認識される彼らですが、大多数が優勢となる社会では、かき消されてしまう彼らの声に焦点を当てて、彼らが安全に、権利が侵されること無く生活し、自立や自己実現に向けて進めるよう、個人、家族、コミュニティ、社会等の多層のシステムに働きかける必要があります。今回は私の今いるアメリカの難民支援の現場のから、日々のソーシャルワーク実践についてお伝えしたいと思います。

難民の現況

国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）は、今年6月、国内に住まいを失い、国外に逃れた難民や難民申請者の合計が、2016年末の時点で過去最高の推計6,560万人に上っていると報告しましたⁱ。その1年前の報告書では、世界では113人に1人が難民化しているという報告がありⁱⁱ、これは現在のコミ福の各学科、各学年のクラスのサイズ感におよそ1人、難民が存在しているということになります。アメリカは、1980年に難民法が制定されて以降、約300万人の難民を世界中から受け入れてきました。1990年から1995年の間は平均11.2万人の難民が毎年アメリカに来ていましたが、2001年に起こった9.11同時多発テロの影響があり、翌2002年の受け入れ人数は2.7万人にまで減少しました。その後、受け入れ人数は緩やかに上昇していたものの、今年1月からのトランプ政権の方針の影響もあり、今年9月末までに推定されていた受け入れ人数は11万人から5万人まで減少する見込みですⁱⁱⁱ。

私が現在生活しているオハイオ州は、過去3年毎年3,000～4,000人強の難民を受け入れてきました。2016会計年度では、カリフォルニア州、テキサス州、ニューヨーク州、ミシガン州に続き、5番目に多くの難民を受け入れました^{iv}。オハイオ州の難民受け入れの特徴として、中西部12州のうちで一番多くのブータン難民を受け入れていることも特筆すべきことです。また同州では、過去約10年の間にミャンマー、イラク、ソマリア、スーダン、コンゴ等からの難民も定住しています。難民としてアメリカに定住した人たちの中には、新しい環境に適応しながら自立した生活を送る人たちがいます。一方で、必要なときに、必要な支援に繋がらなければ、貧困に連鎖に落ち込んでしまうリスクを抱えている人が多いことも事実です。国家機能が麻痺し、迫害や暴力、衛生環境の悪化など、常に身体的・精神的に安全が脅かされる立場にいた彼らの中には、トラウマを経験している人も多く存在します。また、文化やことば、システムの違いはフラストレーションを生みます。馴れない天気や食事、限られた収入、無理解や差別、偏見は慢性的なストレスを生みやすく、健康的にストレスに向き合うことができない場合は、タバコやアルコール、ドラッグなどの乱用、暴力等へ発展することもあります。その反面、特にメンタルヘルスや家族の問題に対する恥の感覚や、スティグマが強い特定の難民コミュニティでは、問題を抱えていても、一番身近なサポートシステムである家族やコミュニティメンバーに助けを求めることができず、クライアントが孤立化することがあります。また、既存のリソースを利用しようとしても、ことばの違いや文化的配慮、移動手段、医療保険といったアクセシビリティのバリアにより、専門家に繋がったとしても、彼らのニーズに対する配慮がなければ、ドロップアウトしてしまうケースも多く存在します。

コミュニティ中心の支援

このように、マジョリティ向けのサービスでは対応しきれない難民のユニークなニーズや生活課題に対して、コミュニティメンバーと一緒にサービスをデザインし、運営している非営利組織団体がクリーブランドにあります。そして私は現在、その団体でソーシャルワークの専門性のもとに、ドメスティックバイオレンス（DV）や性暴力の被害にあった難民女性や子どもの支援、メンタルヘルスの問題に悩む個人や家族の支援を中心に行い、個別のケースマネジメントから、コミュニティアウトリーチ、予防啓発やワークショップ、ペアレンティングクラスやサポートグループのプログラム開発をしています。その団体は、現在70名以上のスタッフにより、30以上ものソーシャルサービスプログラムとプライマリケアを提供しています。そして、特徴的な部分として、難民や移民のコミュニティか

らスタッフを多く採用していることがあります。ケースワーカーや、コミュニティ・ヘルスワーカー、バイリンガル・アドボケイトとして活躍する彼らは、難民コミュニティのダイナミクスや文化を理解し、そのコミュニティの言語を話せるという特徴を活かし、コミュニティと団体をつなぐリエゾンの役割を果たしています。そして、他のスタッフと一緒にどうコミュニティのニーズに応え、エンパワメントと自立支援を推し進めて行くかを考えます。一定以上の英語でのコミュニケーション能力以外は、彼らのスキルや経験レベルは様々ですが、特に直接援助を行うスタッフたちは、自・他団体が提供するトレーニングに参加することで、それぞれの専門領域での技術を向上させていきながら、時にはコミュニティの代表として、市や郡、ほかの支援団体のスタッフを対象にしたワークショップやトレーニングを提供できるようになるメンバーもいます。

ミクロレベルでの実践で、私はよくバイリンガル・アドボケイトのスタッフと一緒にDVや性暴力の被害にあった難民女性を支援することがあります。アメリカではDVは犯罪ですが、たとえば男性が常に優勢な立場にいて、男性が女性に対して暴力をふるうことが当然とされている文化や環境にいた女性たちは、いくらそれが犯罪で自分の身に危険があったとしても、それを暴力による人権侵害だというコンテキストで考えることが難しいことがあります。そんなときは、バイリンガル・アドボケイトと一緒に安全状況や緊急的なニーズアセスメントを行い、サービスの調整を行います。緊急な場合は、安全を確保するために必要な情報を提供し、またクライアントの文化、住環境や生活パターンにあったセーフティプランを一緒に作り、ヘルプの出し方、警察などへの連絡の仕方などを練習します。危機的な状況による混乱や、不安定な情勢・環境で長い間生活をしている女性は、自分自身に対するオーソリティをもてないでいる人も少なくなく、インテークには多くの時間を費やしますが、ひとつひとつ理解の状況を確認め、常に支援者とクライアントが同じ認識でいるかを確認しながらクライアントの自己決定を支援していきます。アドボケイトたちはDVや性犯罪に関する基本的な支援リソース（シェルターや法律相談）や被害者を守る法律についての知識を研修で得ているため、裁判所や警察などクライアントひとりでは心理的負担が大きい場所へも付き添い、制度手続き申請等を一緒に行います。

メゾレベルでは、難民の中年グループに向けてのメンタルヘルスや家庭内暴力予防のためのワークショップを、バイリンガル・アドボケイトと一緒に話し合いながら企画しました。このような問題は問題意識の向上や、予防啓発が不可欠ではありますが、コミュニティにおけるスティグマの強い問題を全面に押し出したセッションでは、自分ごとと捉えられない可能性が高かったり、西洋のようなメ

ンタルヘルスの概念や人権意識を持ち合わせていないコミュニティでは、あまり有意義でないということを私自身が教わりました。そして、最終的にストレスマネジメントという切り口からワークショップを構築し、ストレスを生み出すメカニズムやそのインパクトを説明しながら、すでに彼らが実践している発散方法を参加者同士でシェアし、彼らがすでに持っているスキルや知識といったストレングスに注目し、その延長線上に、経験知を積み重ねていく企画を作ることになりました。実際のワークショップでは、ストレスマネジメントの方法を発表しあうプロセスは全員参加で盛り上がり、歌を歌うことがストレス発散だという参加者が、他のメンバーからの要請で美しい故郷の歌を披露して、メンバーを癒していました。そして、ストレスのインパクトについて話し始めると、参加者数名から、アルコール問題に悩んでいるという話がシェアされ、メンバー同士が自らアドバイスをしあうような光景が見られました。

マクロレベルのニーズに対しても、ケースワーカーやコミュニティヘルスワーカーが、難民コミュニティの声を反映し、プログラムを実現した例があります。難民がアメリカに来て体験する大きな変化のひとつに、食生活があります。彼らの食文化にあった材料を手に入れることは簡単ではなく、輸入食材は比較的高価なものが多いため、日常的な食事はどうしても安価で高カロリー・低栄養の食事メニューに偏りがちです。そして、とある難民コミュニティでは生活習慣病予備軍が増えていました。そんなとき、コミュニティを代表する職員やリーダーたちが、中年の難民男性女性には農業のスキルに長けていることに着目しました。そしてアメリカの都市で散見される都市農園に着目し、団体がコミュニティガーデンを作り、彼らの食文化にあった野菜やハーブを育ててみることになりました。そのパイロットプロジェクトは成功し、当初は自給自足や栄養改善を目的としていたプログラムが、今ではアメリカ連邦政府のオーガニックの認証をとれる畑づくりをするところまで成長し、夏は週に3回のファーマーズマーケットで野菜を売れるほどにまでなりました。そしてこれは、英語を得意としない難民の雇用機会を生み出し、彼らの経済的自立を支援しています。

支援の課題

コミュニティメンバーと一緒に彼らが住みやすい環境をつくり、自立を支援して行くことは、私たちの団体の特徴であると思う一方で、チャレンジだと思う点もいくつかあります。ひとつは文化やことばに配慮したサービスは、クライアントに安心感を生みますが、同時にクライアントが私たちの支援が無くては生活できない状況になってはならない、ということです。どんな年齢でアメリカに移住

したとしても、多くのクライアントは、その後の人生の時間をアメリカ、または出身国ではないどこか他の国で生活することになります。彼らが一部のメンバーに頼ったり、問題解決を委ねること覚えてしまうと、彼らの自立の機会が失われ、コミュニティが活性化しなくなる可能性があります。自分が安心できる、繋がっていると実感できるコミュニティの存在はとても重要ですが、一部のコミュニティメンバーに頼るのではなく、コミュニティの一員として、そのコミュニティをより良いものにしていくためのリーダーシップを、個々人がそれぞれの立場で発揮できるようなエンパワメントが、今後長期的な視点で不可欠だと感じています。

また、私たちは常にマジョリティのサービスには無い視点や、難民・移民の方々のユニークな生活ニーズにを反映したプログラムを、彼らにとってベストであるように作り変えて行く必要があります。いくつかケースを紹介しましたが、難民の女性たちは、ただでさえ打ち明けにくいDVや性犯罪の経験を、一緒に犯罪被害に立ち向かおうとメッセージを発信したところで、サービス利用に結びつくわけではありません。メンタルヘルスやDVのワークショップも、それが何かを説明するものを通訳をして、情報を伝えただけでは無意味です。また生活習慣病予備軍に投薬と運動のアドバイスをしたところで、薬を服用する習慣がなかったり、ジムなどに通うお金も手段もなければ、行動変容には結びつきません。世の中でモデルやベストプラクティスと言われているものが常に使えるわけではなく、リサーチとダイアログを重ねつつ、少数をターゲットにしたパイロットプログラムを走らせながら、リソースの開発を行っていく必要があります。人口規模レベルのインパクトをもたらすコラボレーションやプログラムへの投資に注目が集まる今日、社会問題の解決に多くの人が目を向け、貧困を無くそうという姿勢が見えることは良いことだと感じています。その反面、貧困に直結するマイノリティの、そのまた特化した問題解決のためのプログラムインパクト評価には、依然課題が蓄積しています。アウトプットからアウトカムを重視するのは当然である一方、いまだに一部の助成団体からは、他のマジョリティへサービスを提供している団体と比べて支援者数の数の少なさを指摘されることがあります。助成団体との金銭的なやり取りだけではなく、問題やニーズのユニークさを言語化しながら、特定エリアの支援の必要性を訴えていく必要があります。アメリカの非営利組織の周辺で、近年質的なデータの重要性を支持する声が以前より大きくなっていると感じれることはうれしいことであり、私たちが何をしたかもそうですが、私たちが何かをしたことで、クライアントの何が変わったのかを適切に評価し、社会に伝えて行くことも必要だと実感しています。そして、個々人の行動変容の

末に、コミュニティの、そして社会の変化があることを忘れてはならないと思っています。

最後に

もしよければ最初の冒頭の段落に戻って、下線部を読み直してみてください。そして、みなさんが日常仕事をしているクライアントやクライアントグループを想像してみてください。おそらくアメリカの難民の話は、みなさんから遠い人たちのストーリーではなく、みなさんが日々支援している人たちと似た側面を持っているのでは無いかと思います。アドボカシーやエンパワメントが必要な人たちが、そして平等な社会参加と権利を意味する social justice を必要としている人たちが、みなさんのコミュニティにもいると思います。ソーシャルワークはミクロとマクロの両方の視点に基づき、オフィシャル・アンオフィシャル関係なくリソースを動員し、クライアントやコミュニティにポジティブな変化をもたらすことができる、ダイナミックな学問だと実感しています。拙い文章だったかと思いますが、明日のみなさんに何かに変化をもたらせるものであれば、幸いです。

ⁱ <http://www.bbc.com/japanese/40324032>

ⁱⁱ <http://www.bbc.com/japanese/36573394>

ⁱⁱⁱ <http://www.pewresearch.org/fact-tank/2017/01/30/key-facts-about-refugees-to-the-u-s/>

^{iv} <http://www.pewresearch.org/fact-tank/2016/12/06/just-10-states-resettled-more-than-half-of-recent-refugees-to-u-s/>